内間は遂に奪取せらる

五月十日

前田、仲間地區に在りて約二週間に亘り死闘を續けたる歩兵第六十三旅團長指揮下の獨立歩兵第十一、第十二、第十四大隊は首里に又安波茶附近に在りて約二十日間に亘り善戰敢闘敵に甚大なる損害を與へたる歩兵第六十四旅團長指揮下の獨立歩兵第二十三大隊及獨立機關銃第十四大隊は經塚、澤岻地區に夫々後退せり

以上後退せる第六十二師團の諸部隊は一ヶ月餘に亘る戰闘の爲戰力概ね五分一に低下しあり

混成旅團正面安謝川河口附近敵の行動活潑なり

五月十一日

敵海兵第三軍團は遂に安謝川を渡河し天久台に進入す

首里正面の要衝澤岻附近に對する強壓と相俟つて我が左翼に對する攻撃は頓に激化す新鋭獨立混成第四十四旅團之を邀へて克く戰闘し

あり

五月十二日

經塚、澤岻、天久台附近の戰闘激烈にして天久台の西端四九五高地は遂に奪取せらる

第二十四師團の左翼前田南方地區に於ては彼我縱深に亘り混合し地形の錯雜と相俟ちて紛戰の儘彼我戰線殆ど移動せず中央石嶺正面に於ては建設途上の飛行場滑走路を利用し數十の敵戰車群一擧に首里を衝かんとして反復攻撃し來るも該正面の部隊特に戰車第二十七聯隊克く戰ひ其の九〇野砲四門は敵戰車群を擊攘し悉く之を擊退す

其の右翼方面は敵の行動活潑ならざるも巧妙隱微なる滲透戰法に出でつゝあるものの如く最右翼中城灣岸に於ては大里城趾及屋比久方面よりする重砲兵第七聯隊及重砲兵隊一部の側射に制せられ敵は未だ敢へて運玉森高地に近接せず

五月十三日

混成旅團は天久台上の大半を喪失せるも眞嘉比南側、安里、崇元寺高橋町各北側台端に反斜面陣地を占領し軍砲兵隊支援のもとに敵に甚大なる損害を與へつつ死闘を續行す

五月十四日

第六十二師團は經塚、澤岻を頑守しありし歩兵第六十四旅團の戰力殆ど盡き旅團長以下洞窟の内外に於て敵と手榴彈戰を交ふるに至りしを以て十四日夜暗を利用し敵の重圍を突破して首里に後退せしめ新に平良町、大名、末吉の線を主抵抗線とせり

五月十五、十六日

敵は遮二無二那覇市に侵入せんとして攻撃を強行せるも混成旅團等に獨立混成第十五聯隊は殆ど一歩も敵に讓らず善戰す軍は特設第一旅團にて編成せる精鋭大隊（長伊藤少佐）を混成旅團に增加すると共に海軍陸戰隊より約百組の挺進斬込隊を編成し之を大名末吉方面より敵の背後深く仲西、安謝方面に投入して混成旅團正面に對する敵攻撃力の緩和に勉めたり

五月十七日

第二十四師團正面に於ては不完全なる陣地に據る第一線歩兵は連日の敵砲爆に依り死傷續出し陣地組織も不備弱點を形成するところ少からず西原村一五〇高地は敵に奪取せられた

五月十八日

戰線大なる變化なし

軍は混成旅團の現陣地線潰ゆるも依然首里を中心とする陣地線に於て戰闘を繼續する目的を以て海軍陸戰隊三ヶ大隊（各五、六百名より成り戰闘には未熟なるも機銃裝備は概して良好なり）を首里の陣地に連接し繁田川、識名、國場、古波藏の線に配置せり

天久台、那覇の線の崩壞に瀕せるは一見軍にとりて致命的痛手にして軍首腦部は勿論全軍將兵を失望落膽せしめたるも首里の大據點の

嚴存する限り前述の線は國場川の障碍に托し然も南岸高地帶より有效なる支援を受け得る要線にして首里戰線左翼最後の運命を托するに足るものなり

五月十九、二十日

諸情報を綜合するに混成旅團の必死的抵抗に會せる敵海兵軍團の損害は甚大なるものの如く天久台方面敵の攻擊は著しく低調となり同方面戰線に在る將兵の志氣頓に昂揚す

爾餘の戰線も亦敵の攻擊活潑ならず敵後方兵力の移動は相當活況を呈しあり

五月二十一日

大里城趾を據とする重砲兵第七聯隊敵の集中砲擊に依り破壞され默するに至るや東海岸方面の敵は漸次東飛行場を越へて運玉森高地に肉迫し始めたり

五月二十二日

軍の組織的防禦力方に破斷界に達せんとし緩徐ながら全線敵に滲透せられ之に反撥する戰力盡きたるものの如し

特に最右翼に於ては敵は巧に我が死角を利用して與那原に進入し最左翼に於ては海陸呼應して那覇市に進入しつつあり

左翼戰線は那覇市に侵入せらるるも尙識名、國場の線に至る縱深陣地帶に據り尙全陣地の崩壞を阻止し得べきも與那原に侵入しつつある敵は右翼の最要點運玉森を略取し一擧津嘉山に殺到し得る態勢に在り今若し軍にして急速に此の敵を排除するにあらずんば首里戰線の維持は遂に不可能となるべし敵の慣用戰法たる滲透戰術に對しては牧港、安謝川の戰例に敎ふる如く其の尖端戰力の强化せざるに先だち之を一掃するを要訣とす依つて軍は迅速に與那原侵入の敵を擊攘する如く第二十四師團及軍砲兵隊を督勵するところあり

五月二十三日

一、退却の決心

全軍將兵心死の敢闘に拘らず首里戦線の運命今や旦夕に迫れることは明らかなり

茲に於て軍が首里を中心とする圓形複郭陣地に據り最後の戦闘を試みるや或は首里戦線を放棄して知念半島若くは喜屋武岬方面に後退し以て要害堅固にして殘存兵力に適應する地域に於ける新持久作戦に出づべきやは豫ねてより愼重検討中なりしが今や至急決定を要する重大事となれり

新持久方策に關する各案の検討結果左の如し

一、首里複郭案

本案は平時よりの一構想にして陣地も亦之に應じ整備せられあり然れども生存將兵の數は尚五萬内外（精鋭分子は殆ど死傷し且歩兵兵器の大部は消耗しあり）と推定せられ斯かる大兵力を直徑一粁内外の狹少地域に配置するは徒に敵物量攻撃の好餌となるのみにして有利ならず殊に今尚大部健在しある遠戦兵器の如きは本複郭陣地には殆ど收容し得ざるに於て益〻然り

二、知念半島後退案

四圍殆ど斷崖と海を以て圍繞せられ對戦車戦には有利なるも洞窟陣地の數少くして軍の殘存兵力を收容するに足らず既集積軍需品も亦貧弱然も軍の右翼與那原附近に致命的破綻を生ぜんとしある狀況に於て彼我全般態勢上軍主力を該方面に後退せしむることは頗る困難にして地形交通網の關係も亦頗る不利なる狀態に在り

三、喜屋武半島後退案

喜屋武半島地區は八重瀬岳及與座岳を陸正面の據點とし海正面の大部は單獨兵と雖も攀登至難なる三、四十米の斷崖を形成し眞好なる一防禦地帶なり加ふるに人工若くは天然の洞窟豊富にして概ね軍の殘存兵力を收容するに足り軍需品は第二十四師團所屬のも の今尚該地域に相當量集積せられあり更に一般態勢及交通網の關係は軍主力の後退及軍需品後送に便なり

本案の知念半島案に比し遜色あるは陸正面に於ける地形比較的平易なる部分ありて敵機甲部隊の行動容易なる點にあり

軍は以上の如く各案を檢討したる後第三案を以て最も有利とせり

二十二日夜軍は更に各兵團の參謀長、高級部員を招集し軍最後の戰鬪態勢決定に關し協議せり本席上に於ける各兵團の意見左の如し

第六十二師團

師團は形而上下の戰力殆ど盡き新に後圖を策するの餘力なく然も首里附近の洞窟には後送至難なる數千の重傷者充滿しあり師團長としては是等の戰友を見棄てて遠く知念若くは喜屋武方面に後退するを得ず、師團は麾下將兵大部の戰死せる現戰線に於て殘存の將兵と共に最期を全ふ致し度き意見なり

第二十四師團

喜屋武半島方面後退の意見なり理由は軍の研究せるところに同じ

第二十四師團は周到なる著意と努力に依り尚數十輛の貨物自動車を保有しありて今後天候良好ならば殘存の軍需品は五日以内に新陣地に後送し得べきことを附言せり

獨立混成第四十四旅團

知念半島後退を可とする意見なり

軍砲兵隊

喜屋武方面後退の意見なり

軍司令官は二十三日夜半以上の經緯に基き喜屋武方面に後退を決心し第一線主力の後退は五月二十九日頃と豫定し傷者及軍需品の後送は即刻開始する如く命令せり

二、新戰鬪指導計畫概ね左の如し

其の一　喜屋武半島陣地占領計畫

方針

軍は殘存兵力を以て城名城、八重瀬岳、與座岳、國吉、眞榮里の線以南喜屋武半島地區を占領し勉めて多くの敵兵力を牽制抑留すると

共に血を強要し以て國軍全般の作戰に最後の寄與を爲す
陸正面に於ては八重瀬、與座兩高地を據點とする主陣地帶に全力を
投入して抗戰するを主義とす

部署の概要

一、獨立混成第四十四旅團
主力を以て坡名城、八重瀬岳の線を占領し一部を以て海正面を警
戒す
二、第二十四師團
與座岳附近より國吉、眞榮里を經て名城に至る線を占領す
三、前記兩兵團は一部を以て具志頭、富盛、世名城、西原、屋取、兼
城、糸滿の線を占領す
四、第六十二師團
名城より麼文仁に至る海正面を占領す
此の間兵力の掌握整備を實施し且臨機混成旅團及第二十四師團正

面に機動進出し得る如く準備す
五、各兵團作戰地境を左の如く豫定す
獨立混成第四十四旅團第二十四師團間
九六高地、一五六高地、世名城、東風平の線（線上第二十四師
團に屬す）
第二十四師團第六十二師團間
九六高地、眞壁村、名城北端の嶺（線上第二十四師團に屬す）
第六十二師團獨立混成第四十四旅團間
麼文仁、九六高地の線（線上は第六十二師團に屬す）
六、軍補兵隊
獨立工兵第一、眞壁、眞榮平間の地區に陣地を占領し各兵團等に第
二十四師團及混成旅團の戰鬪に協同し得る如く準備す
七、海軍根據地隊
軍占領地域所要部地區とし細部の位置は狀況に應ずる如く決定す

各兵團に配屬せる部隊は其の儘とす

其の二　後退作戰指導要領

（註、本要領は二十三日以後與那原方面の戰況發展に應じ逐次修正せり）

方針

企圖を秘匿しつつ現戰線を離脱し一擧に喜屋武半島陣地に後退するを主義とするも有力なる一部を各要線に殘置して地域的持久抵抗を行ふ第一線主力の撤退時機は五月二十九日夜と豫定す第六十二師團の與那原方面反擊奏功せば之を延期す

部署の概要

一、第六十二師團は五月二十五日夜首里出發津嘉山附近を經て同地東南地區に轉進し與那原方面より突進する敵を撃滅す

止むを得ざるも敵の突破を現在線以北に阻止し軍主力の退却を掩護す首里直接防禦部隊たる獨立歩兵第二十二大隊は之を殘置し第

二十四師團長の指揮下に入らしむ

二、第二十四師團は五月二十九日夜主力を以て現在線を撤し其の作戰地域を新陣地に後退す

各有力なる一部を左記要線に殘置し逐次敵の前進を遲滯せしめつつ後退す

現陣地線

五月三十一日夜撤退

喜屋武、津嘉山、國場川の線

六月二日夜撤退

繞波川の線

六月四日夜撤退

三、獨立混成第四十四旅團

五月三十一日夜一擧に現陣地を撤し新陣地に後退す

四、各兵團の後退地域の境界左の如し

（第六十二師團の轉進後のものとす）

第六十二師團第二十四師團間

兼城、津嘉山東端、山川、東風平東端、富盛の線

（線上は第六十二師團に屬す）

第二十四師團獨立混成第四十四旅團間

眞玉橋、小城の線（線上は第四十四旅團に屬し小城以南の行動は自由とす）

五、軍砲兵隊

依然現任務を續行特に第六十二、第二十四兩師團の與那原方面に對する反擊に協同す

全砲兵の後退は三十日拂曉迄に完了する如く準備す

六、海軍根據地隊

現陣地の外有力なる一部を以て長堂西方高地を占領し軍主力の後退を掩護す兵の後退の時機は全般の作戰推移を考察し軍司令官之

を定む

五月二十四日

第二十四師團は與那原に進入せる敵を擊攘する能はず

軍は海軍陸戰隊の一部、軍砲兵隊にて臨時編成せる徒步部隊約一大隊、嘗て與那原正面の守備に任ぜし第二步兵隊第三大隊（第六十二師團の指揮下に入り澤岳附近の戰鬪に參加し生存者大隊長以下約四名一等軍として使用し得る濃りの兵力）第二十四師團に增加せり

第六十二師團は正面を大名、末吉の線に縮少し重疊中なり

獨立混成第四十四旅團は那覇市方面に於て逐次蠶食せられつつあり

天久台東南角は依然頑守しありて其の健鬪に賞讃に價す

軍の後方整理は續行中なるも折から沖繩の雨季襲來し道路は泥濘と化し輸送車の如く進捗せず

五月二十五日

第二十四師團は運玉森高地を、重砲兵第七聯隊は雨乞森高地を夫々

奪取せられ敵突破口の尖端は島袋附近に到達す

軍は極力右諸部隊をして突破口の擴大を阻止せしめつつ第六十二師團主力（戰鬪員約三千）を首里地區より津嘉山東南地區に轉用し惡天泥濘の爲に敵の戰車、空軍、艦砲の活動困難且物量の戰線補給十分ならざるに乘じ與那原方面に退却攻勢を取り敵に痛擊を加へ以て軍主力後退の自由を確保し爲し得れば該方面の敵を與那原以北に擊攘し依然首里戰線を保持せんとするに決す

五月二十六日乃至二十八日

第六十二師團は二十五日夜先ず歩兵第六十四旅團を津嘉山東方地區に先遣し該地區に在りて敵の突破に備へありし特設第三聯隊其の他部隊を併せ指揮し爾して喜屋武、宜平の線を保持せしむると共に師團主力は二十六日夜神里東南地區に轉進し當時雨乞森、大里城趾を失し眞境名、伯福方面に後退中なりし重砲兵第七聯隊及船舶工兵第二十三聯隊　軍命令に依り知念半島より北進中なる特設第四聯隊

主力を併せ指揮し二十七日頃平良附近に進出南下する敵に對し攻擊を開始せり

第二十四師團及混成旅團の正面は全線敵に滲透を恣にせられあり軍司令官は二十八日全般の狀況特に第六十二師團の攻擊意の如くならざるに鑑み豫定の如く二十九日夜を期し喜屋武半島地區に後退するに決せり之より先軍司令部は二十七日夜津嘉山に移動せり海軍根據地隊は軍の企圖を誤解し逐次喜屋武半島地區に後退中なりしが軍命令を正解するや再び小祿地區舊陣地に復歸せり

第六款　軍の喜屋武半島地區への後退（五月二十九日乃至六月四日）（要圖第七參照）

五月二十九日

第二十四師團主力轉進を開始す

五月三十日

敵の攻擊緩慢にして諸隊の後退は整然と進捗し豪も潰亂の狀なし

軍司令官は二十九日夜津嘉山出發三十日拂曉迄に摩文仁南側八九高